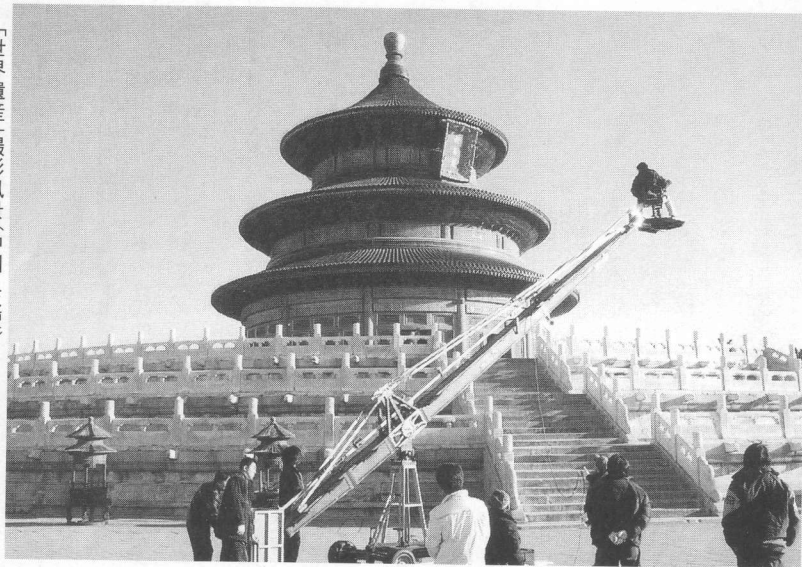


10周年を迎え、新鮮な目を失わずに TBS『世界遺産』

辻村 国弘(TBS)

「世界遺産」撮影風景(中国・天壇)



みん
な
の
話
う
民
放
史

題字

中川 順



筆者近影

新聞の一番後ろのテレビ欄、その片隅で殆んど目に付かないような小さなスタートをした番組が、この4月に10周年を迎えました。かけがえの無い地球の宝をひとつずつ、30分かけてじっくり見せる番組は世界中でこれだけです。世界遺産は現在812を数えますがこのうち10年の間に紹介したのは470カ所余り。長い道のりでした。

しかし番組内に「10周年の祝賀」ムードは今のところ見られませんが。

4月一杯、5回にわたってスペシャル番組を組み、ナレーターに高倉健さんをお迎えしたこと(これだけでもスタッフ全員緊張しまくりましたが...)。

また5月からは、新しいナレーターとして歌舞伎の中村勘太郎さんが決まり、その記者発表などに

忙殺されたこと。

加えて4月から予算がカットされる等、番組をめぐる環境がますます厳しくなったことから、10周年を意識するどころではなかったからです。

「世界遺産」とは：

世界遺産の考え方は1960年代エジプトのヌビア遺跡がアスワンハイダム建設で水没する危機を救うためユネスコを始め、世界中が協力する決意を確認したことに始まります。

このとき日本も含めた各国は資金だけでなく、遺跡を救うためのアイデアと技術を持ち寄りました。

その結果最大のアブシンベル神殿を2000のブロックに分割した上で65メートル高い位置に移して組立て直すという前代未聞の国際プロジェクトが実現したのです。

この「事件」は地球規模で文化財を守ることの意味と可能性を世界中に認識させました。

そして1972年のユネスコ総会で、文化と自然にまたがる「普遍的な価値を持つ地球と人類の宝」を世界遺産とし、これを守る

ための「世界遺産条約」が成立したのです。現在、条約の締結国は182カ国にのぼり、ユネスコの活動の中でもっとも成功したもののひとつとされています。

ユネスコは2001年から生きた人間が受け継ぐ「無形文化遺産」を提唱。日本の「能楽」「文楽」「歌舞伎」を含む90件がすでに登録されています。

手探りの「番組」スタート

日本が世界遺産条約を批准したのは1992年。先進国としては異例に遅い批准でした。

初めての世界遺産登録は翌年。

「白神山地」「屋久島」「法隆寺」「姫路城」でした。(2006年現在、日本の世界遺産は昨年登録の知床を含め13カ所に増えました)。

そして私たちの番組が始まったのがその4年後。日本ではまだ誰も世界遺産という言葉さえ知らないそんな頃でした。取材で地方に行くと、必ず聞かされた質問は「世界遺産で、何ですか?」「世界遺産になるとお金もらえるの?」「といったものばかり…とはいえ他人のことは言えません。

番組作りのスタッフ自体、何も

アンコールの尖塔群を撮る(カンボジア)



知らなかったのです。専門家も、参考書も確にない中で番組は手探りのスタートを切るしかありませんでした。

今考えると結果としてそれが良かったのかも知れません。判らないまま、常に「何故?」「どうして?」と問い続ける「初心」を、番組スタッフが持ち続けたことがいい意味での緊張感と活力を生んだ、と私は見えています。

意気込み…

番組のスタートに当たって我々に多少の気負いが無かったわけではありません。当時まだ世界遺産を本格的に取り上げたシリーズは世界中見渡してもありませんでした。世界遺産にふさわしい最高の映像で、後世に残る番組を…。

そう、「映像の世界遺産」とでも呼べるものが出来ないか？

スタッフの熱い議論の中で、レポーターなし、グルメも旅もなし、デジタル映像でひたすら世界遺産そのものを真正面から取り上げる、という現在まで続くスタイルが打ち出されました。

しかし、こんな地味な番組で視聴者はついてきてくれるだろうか？

一つの遺産だけで30分をどう構成すればいいのか？

動かないたった一つのカテドラルをどう映像にするのか？

スタッフの悩みと疑心暗鬼は1年近く続きました。

突破口を開いたのは、翌年3月、中国の黄山を扱った番組でした。

水墨画そのものといわれる深山幽谷の舞台。ディレクターは黙って7分間、雲の動きと山々のたたずまいを、ナレーションなしで見せたのです。

キジー島(ロシア)の木造教会



余計な演出や説明なしで本当に素晴らしい世界を見るに値する…

価値あるものを黙って提示する。テレビはそのことを忘れてきたのではないか？

衝撃的に教えてくれた番組でした。

「黄山」でスタッフの迷いは吹っ切れたのです。

「世界遺産」そのものと真正面から向き合う…今も続く番組(日曜夜11時30分放送)の基本的なタンスがこのとき出来上がったと私は思っています。

アーカイブスを意識して…

「映像の世界遺産」という言葉にはもう一つ「魅力的なアーカイブス」を指す気持ちが入り込められていました。

テレビは多チャンネル時代に足を踏み入れたばかり、通信との垣根も徐々に無くなりつつある中で、各局とも優良なソフトを喉から手が出るほど欲しい時代に差しかかっていました。「世界遺産」はまさにそれに応えうる最適の番組と目されたのです。

「デジタル・アーカイブス」…何時でも、好きなときに、瞬時に取り出せ、最良の画質で自由に利用できる「映像の資料庫」。

番組『世界遺産』はこのアーカイブスの役割を始めるから担っていたのです。

デジタル収録に拘ったのも(1999年からHDに移行)レポーターを敢えて置かなかったのも全てそれを意識してのことでした。

貧乏取材で贅沢な映像を…

予算が潤沢なTV番組などありはしないと思いますが、全世界を回り、HDの30分を年に50本

も作るのは並大抵ではありませ
ん。かといって全てを切り詰め
ばそれで済む…という訳でもあ
りません。

番組はやがて、取材は質素に、
映像は贅沢に、を合言葉にしてゆ
きます。宿代、食事代、移動費用
全てを切り詰めました。

一回の取材で必ず3カ所の遺産
を回ることが原則ですが、全てこ
れコスト削減のなせる業です。

その代わり空撮やクレーンやレ
ールを使った移動ショット、照明
など映像のためには可能な限りお
金と知恵を絞ります。一昨年には
世界で唯一稼働していた最高の防



空撮の村上カメラマン

振装置・シネジャイロをニュージ
ーランドから取り寄せ、モンサン
ミシエルはじめヨーロッパの名だ
たる文化遺産の空撮にチャレンジ
しました。映画『ロード・オブ・
ザ・リング』で活躍した特別機器
です。後々まで尾を引くお高いも
のになりましたが映像は極めて満
足の行くもので、番組の財産とな
っています。

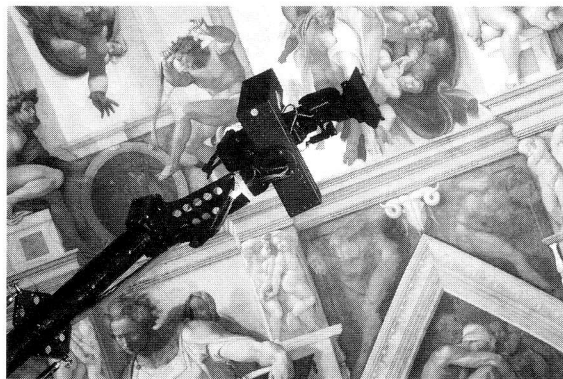
システイナ礼拝堂の場合

撮影にかけるスタッフの意気込
みを一例を挙げてご紹介しまし
う。

バチカンのシステイナ礼拝堂。

この天井画はミケランジェロが
生涯かけて描いた傑作ですが、何
しろテニスコート2面分というく
らい広いのです。この天井画全体
に照明を当てズームバックで一気
に引きさる…というのがダイレク
ターのねらいですが、難問山積で
した。

まずローマにある有名な映画の
撮影所「チネチッタ」の巨大な撮
影スタジオから照明装置が運ばれ
ました。タングステンの柔らかな
光りを大天井に満遍なく当てるに
は最適と、チネチッタの照明マン



システイナ礼拝堂の壁画に迫るクレーンカメラ

が太鼓判を押してくれました。但
し仕掛けは大掛かりなことにな
りました。

普段は上から照らす巨大なライ
トをシステイナの床に一つずつ三
脚を付けて、上向きに20台設置し
なければなりません。

撮影に許された時間は観光客が
帰った後の午後4時から11時ま
で。スタッフ総がかりで秒読みの
設営が終わって、カメラが回り始
めたのは夜になってからでした。
結果はどんなことになったか?
天井画の中心「アダム創造」。

ぼつかりとスポットが当たった神とアダムの指先のアップから、ゆつくりと回転しながら天井画一杯にズームバックする画面では、途中から徐々に天井画全体が明るくなり始め、遂には完璧な照明の下にその全貌を現すのです。

ライティングの効果が絶妙な映像でした。

このときカメラの微妙なブレを防ぐため三脚は通常の倍の重さのものを使い、カメラの下には30キロの砂袋を下げ、さらにズームの間中カメラマンは息を止めていました。

まさに現場の執念が伝わるようなエピソードです。

取材現場

さて、世界遺産の取材チームは4人。ディレクター、カメラマン、ビデオエンジニア(ビデオエンジニアと言うのは映像全てに責任を持つプロです)。それに照明マン、たったこれだけ。テレビの撮影チームとしては、この業界では最小限というべきでしょう。

この人達が500キロもの機材を抱え、40日もの間熱帯のジャングルをさ迷い歩くのです。私はよ

く「4人で、全盛期の小錦二人を連れている」と表現します。彼らのバッグにさりげなく「世界悲惨」と記されているのを私は見て見ぬ振りをしています。そのかれらのエピソードを、私は昨年、パンフレットにこう書きました。

T ディレクター

アフリカのサバンナをロケ中、「ワシヤワシヤ」という毒虫に刺され、意識不明で現地の病院に担ぎ込まれ、

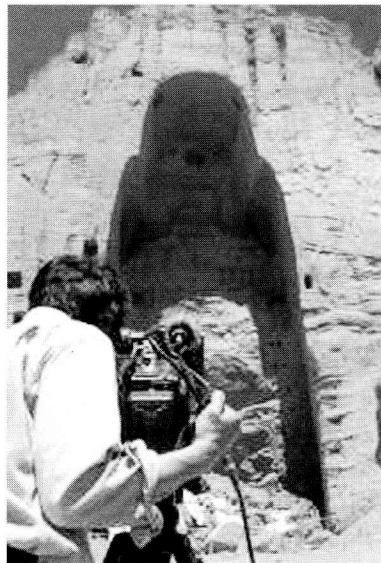
死にかける。

K ディレクター

リビアロケで、ジープから砂漠に右足をドンと下ろしたら、5センチ横に鉄の突起が：地雷だった。死にかける。

E ディレクター

エベレストロケで、空撮のヘリコプターが高度8000メートルでエアポケットにはまり2000メートルも落下。死にかける。



破壊されたバーミアン遺跡

H ディレクター

アルジェリアロケで、突如として大洪水に襲われ、多数の死者と共に、機材一切を流され：

死にかける。

I ディレクター

中国ロケで白酒の乾杯攻勢に遭遇、軍人と乱闘になり、池に投げ込まれ肋骨を折り、

死にかける。

誇張でも何でもなく現場の人達は連日こんな目に遭いながら世界遺産をもっともとと素晴らしい番組にしたいと汗を流しています。

これから…

始めに私は10周年を迎えても番組内に祝賀ムードは無かったと書

きました。予算カットのことにとも触れましたが、実はそれ以外にも番組をめぐる環境は年々厳しくなっています。

はつきりいますと、どの世界遺産も撮影の許可がなかなか下りず、下りたとしても、とてつもなく撮影料を要求されることが極めて多くなったのです。パチカンやモスクワのクレムリンなどは許可を得るまでに1、2年の交渉は当たり前ですし、中国では世界遺産のほとんどを管理している「国家文物局」がなかなかOKを出してくれません。また撮影料の高騰は全世界的な傾向です。

加えて10年間に500カ所近い取材をしますとこれからは遠隔地ばかりが残ることになります。南極に近い海上には現在4カ所の島々が世界遺産として登録されていますがこれなどどうやって行けばいいのか途方にくれるばかりです。

また自然世界遺産では特にヘリコプターでの撮影が禁止されるなど(鷲や鷹の生態に悪影響を及ぼすというのがその主な理由です)。カメラがなるべく動いて独自の映像を撮るという番組の独自性も

発揮しにくくなります。

いささか八方塞がりという状況の中で、10周年といえどもスタッフは厳しい表情を崩す訳には行かないのです。

幸い今のところ多くの視聴者の方々やユネスコからも番組は高い評価を頂いているものの、10年を迎えて先行き多難を感じざるを得ません。

おしまいに…

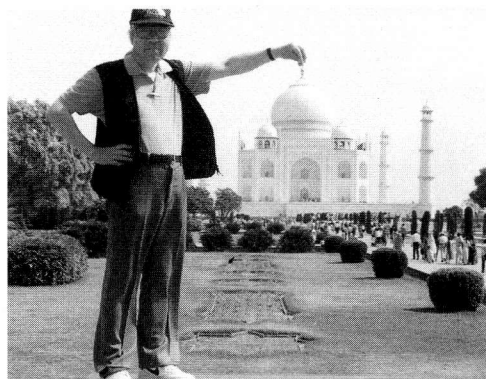
現在、812カ所にも増えた世界遺産はこれからも増え続けるのでしょうか？

世界遺産検定などというものが出来たのは如何なものか？

富士山は世界遺産になれるのか？ NHKが妙に力を入れ始めた世界遺産の番組はどうなるのか？

「世界遺産」は、今日日本でひとつのキーワードになっています。一番組の思惑を超えて今の日本には「世界遺産」という言葉があふれかえっているように思えます。

このような中で11年目に入った番組をどう舵取りしていくのか？ 今番組スタッフ全員の重いテーマといえましょう。



タージ・マハルをつまむ筆者

写真提供 番組『世界遺産』

<http://www.tbs.co.jp/heritage/>

1台のカメラがあらゆる角度からイグアスの滝を狙い立体的な映像を構築しました。バレンシアでは、絶妙なパンド15世紀の遺産が内に秘める「時の流れ」をひき出しました。映像が語る。それが「世界遺産」の生命です。カメラスタッフには、悠久の時、静寂、美、量感、人の営みの多様で確かな映像が求められます。卓越した技術以外に、最良の視点を限なく求める、カメラ、一瞬を逃がさない目が、この映像番組の生命を支えて来ました。

へ99年ギャラクシー特別賞 選評から